

# ICT を活用した国際交流学習に関する実践報告

― 日韓高等教育機関における外国語クラスを例に ―

谷 誠司, 内田智子, 吉田広毅, 増井実子, 中山晃

Online International Cooperative Learning : A case of Foreign  
Language classes between Japanese and Korean Universities

Seiji TANI, Tomoko UCIDA, Hiroki YOSHIDA  
Jitsuko MASUI, Akira NAKAYAMA

2015 年 11 月 20 日受理

## 抄 録

本稿は、済州大学校（韓国）と常葉大学（日本）との間で、2012 年 10 月～12 月にかけて行った国際交流学習の実践報告である。済州大学の日本語クラスと常葉大学の韓国語クラスで、両校混成グループを作り、オンライン上で交流をしながらグループ課題を達成するまでのプロセスを紹介すると同時に、両校における問題点の把握から交流の結果の検証までをアクションリサーチの手順<sup>1</sup>で示した。また、学生に対して行った事前・事後のアンケート調査の分析を行うことで、今回の交流学習の意義や成果、問題点等を明らかにした。

キーワード：韓国，日本，国際交流学習，オンライン，日韓混成グループ

### 1. 本稿の目的

本稿は、2012 年 10 月～2012 年 12 月にかけて行った「ICT を活用した国際交流学習」の試みを紹介するものである。済州大学校（韓国）の日本語クラスと常葉大学（日本）の韓国語クラスで約 2 か月間にわたって行われた活動を、アクションリサーチの手順に沿って報告する。

### 2. 研究の背景

韓国の大学で日本語を学ぶ際、問題となるのが日本語の練習量である。済州大学校の日語日文学科では専任の日本人教員は内田 1 人であり、学生たちが学科内で日本人留学生と交流する機会もほとんどない。大学内で学生たちが生の日本語に触れる機会、特に自ら日本語による発信をする機会は極めて少ないため、日本人大学生との交流が

<sup>1</sup> アクションリサーチに関しては、Nunan, D. (1993). Action research in language education. In Edge, J. and K. Richards (eds.) Teachers Develop Teachers Research. Heinemann. 横溝 紳一郎 (1999) 「アクションリサーチのススメ」『月刊日本語 5 月号』pp.62-65 を参考にした。

できれば、日本語運用力の向上に大きく寄与できると思われた。一方で谷が所属する常葉大学グローバルコミュニケーション学科には、1年生対象の韓国語会話入門という授業があるものの、学内で学生が韓国人と交流する機会はなく、韓国人大学生との交流が可能となれば、韓国への理解も深まり、学習意欲の向上が望めるのではないかと考えた。

学校間の交流学习自体は近年関心が寄せられている学習形態であり、稲垣 忠(2004)<sup>2</sup>によると、「コミュニケーション能力」「他地域や異文化を理解する力」「学習を追究する意欲」「協同作業する力」の向上が認められる<sup>3</sup>とされる。また、国際交流学习に関しては中俣尚己(2013)<sup>4</sup>があり、言語学習における一定の成果を報告している。

まず、活動内容を考えるに当たり、両校の学生に対して実態調査・意識調査を行った。学習信念、学習動機、相手国に関する情報源、相手国に対するイメージ、コミュニケーション力等に関する100項目ほどの設問を用意した。回答の詳細な分析は別の機会に譲るが、各校で目立った特徴は以下の通りである。

#### 【済州大学】

- ・日本や日本語に対する関心が高い学生が多い
- ・授業以外で日本語を使用する機会が少なく、不満を感じている学生が多い
- ・日本語の上達のためには、とにかく使用することが大切であるとする学生が多い

#### 【常葉大学】

- ・韓国や韓国語に対する関心が高い学生が多い
- ・韓国人の知人がいる学生、韓国人との交流経験がある学生が少ない
- ・交流経験がなくても、韓国人に対してある一定のイメージを持っている学生が多い
- ・グループ学習、知らない人とのコミュニケーションに自信がない学生が多い

以上の結果をもとに、活動内容の計画を行うこととした。

### 3. 交流活動の計画

以上のアンケート結果より、済州大学の学生は、日本語に対する学習意欲・日本に対する関心は高いものの、日本語の使用機会や日本人との交流機会が少なく、現状に不満を感じていることが判明し、日本人と日本語で交流する機会が提供できれば大きなプラスになると考えた。一方常葉大学の学生は、韓国語学習や韓国文化への関心は高いものの、学内での韓国人との交流はなく、交流機会を提供できれば韓国文化への理解も深まり、さらなる学習意欲の向上も期待されるのではと考えた。また、コミュニケーション能力やグループ学習という形態には自信がない学生が多く、大学1年生に対して、高校までとは異なるグループ学習、交流学习を通して、協同作業を体験さ

<sup>2</sup> 稲垣忠・黒上晴夫・中川一史(2004)『学校間交流学习をはじめよう：ネットの出会いが学びを変える』三晃書房

<sup>3</sup> 稲垣前掲書 pp.24-25 稲垣はこれ以外に「情報活用能力」を挙げているが本稿では扱わない。

<sup>4</sup> 中俣尚己・漆田彩・小野真依子・北見友香・竹原英里(2013)実践報告「Skypeを活用した日中会話交流プログラム」(『実践国文学 83』)

せることは意義があると考えた。

そこでまず、稲垣（2004）の分類に基づき、以下のように具体的な目標を設定した（表1）。

表1：本交流学习での目標

稲垣（2004）の枠組み	交流学习で期待する効果
コミュニケーション能力	相手国の学生とコミュニケーションを積極的に図ろうとする態度や自信の育成 日本語による共同作業を通しての日本語運用力の向上(济州大のみ)
他地域・異文化理解力	異文化間における相互理解の重要性の認識
学習を追究する意欲	目標言語への学習動機の誘発 目標言語国への関心・興味の誘発
協同作業する力	グループで協力的に課題に取り組む能力の育成

次に活動の内容を具体化することとした。稲垣（2004）では、交流の形として「交流体験型」「実践報告型」「共同調査型」「協働活動型」の4種を提示している<sup>5</sup>。この分類と稲垣の提示した「交流の活動タイプと育てたい力」の表<sup>6</sup>、期待する効果等を吟味し、「交流体験型」と「共同調査型」を組み合わせた活動を計画した。

#### 4. 交流活動の概要

計画・実施した活動の概要は以下の通りである。

(1)対象クラス：

济州大学 上級日本語会話クラス（3年生中心・2クラス・計36人）

常葉大学 韓国語会話入門クラス（1年生・2クラス 計23人）

(2)期間：

2012年10月～12月（実際の交流期間は6～7週間／グループ組織～発表までは全9週）

(3)交流媒体：Yahoo! Groups

(4)活動内容と手順：

①両校混成の少人数グループを作る

②グループ単位でテーマを決め、Yahoo!Groups上で意見交換をする

③必要であれば各校でアンケート調査を行い、結果を報告し合う

④PPTによる資料を作成し、各校で交流の成果を発表する

なお、交流・発表は全て日本語で、交流自体は授業時間外で行うこととした。

(5)テーマの条件：日韓大学生の意識や実態を知ることができるもの

#### 5. 実践の報告

実際に活動を行ったのは2クラスであるが、以下、紙面の都合上1クラスを例に取

<sup>5</sup> 稲垣前掲書 pp.21-22

<sup>6</sup> 稲垣前掲書 p.54

り、実際に行われた交流活動の報告を行う。

### 5.1 グループ組織とテーマの決定

まず各校で A ～ E の 5 グループを作り、マッチングを行った。交流は日本語で行うため、済州大側はグループ間で日本語力に極端な差が出ないように注意を払った。次に済州大がグループごとに調査したいテーマを 3 つ考え、常葉大のメンバーがその中から一つのテーマを選ぶという形でテーマを決定した。ここまでの流れは教員主導で行った。

結果、メンバー構成とテーマは表 2 のようになった。

表 2：メンバー構成とテーマ

グループ	メンバー	テーマ
A グループ	6 人（済：3 人・常：3 人）	韓流
B グループ	5 人（済：3 人・常：2 人）	ファッション
C グループ	5 人（済：3 人・常：2 人）	食べ物
D グループ	4 人（済：2 人・常：2 人）	テレビ番組
E グループ	5 人（済：3 人・常：2 人）	アルバイト

次に教員は Yahoo! Groups に各グループの掲示板を作成し、メンバーは各自自分の Yahoo! Groups<sup>7</sup> に登録を行って交流を開始した。最初の課題として自己紹介の投稿、グループ単位での計画表の作成を課した。その後は、テーマに関する具体的な調査項目の決定や意見交換に移り、相手校の学生への質問の投稿、回答を繰り返しながら相手国の実態調査を行った。

### 5.2 投稿回数

テーマ決定後の 10 月 22 日から本格的な交流活動が始まった。最終週の 12 月 7 日までの各グループの掲示板への投稿回数を表 3 に示す。

表 3：最終週の 12 月 7 日までの各グループの掲示板への投稿回数

グループ	前半 (10.22 ～ 11.4)	中盤 (11.5 ～ 11.18)	後半 (11.19 ～ 12.7)
A グループ (計 46)	13	20	13
B グループ (計 41)	7	12	22
C グループ (計 43)	8	16	19
D グループ (計 36)	5	14	17
E グループ (計 50)	9	16	25

前半の 2 週間は多くのグループが 1 桁台の投稿であった。1 人当たり 2 週間で 1 回

<sup>7</sup>Yahoo! Groups は 2014 年 5 月 28 日にサービスが終了しているが、詳細に関しては、本稿末尾の【参考資料 1】を参照されたい。「掲示板」以外に、ファイルをアップロードできる「ブリーフケース」、写真をアップロードできる「フォトアルバム」等の機能がある。

～2回の投稿と考えてよい。原因としては、授業時の欠席などで登録がスムーズに進まなかったことが大きい。済州大生にとっては、日本語サイトの登録ということと言語的にも難易度が高かったようである。前述の通り登録後には自己紹介をするという課題を与えたが、各自簡単な自己紹介を投稿するのみで、互いに相手の様子を伺っている印象があり、テーマに関する議論はほとんど進まなかった。そこで、教員が「今週中にすべきこと」のリストを投稿したり授業中に指示をするなどして交流を誘導した。

中盤になると各グループ調査項目の詳細が決定し始め、意見やコメントを書き込む回数が増えてきた。ただ、投稿回数が課題の進捗を意味しているわけではなく、投稿・コメントの試行錯誤を繰り返しながらもなかなか議論が進まず全体像が見えてこないグループも見受けられた。後半は最終週の発表に向け、各校でのアンケート調査の結果報告や細かい部分での意見交換が行われた。ここではほとんどのグループが発表の全体的なイメージを完成させており、密度の高い交流が行われている。

### 5.3 調査項目

中盤からは、テーマに沿って両国の比較ができるような質問項目を考えての意見交換が行われた。各グループの調査項目の一部を以下に示す。

#### 【A グループ（テーマ：韓流）】

- ・韓国で人気のある韓国ドラマは？
- ・日本で人気のある韓国ドラマは？
- ・韓国で人気のある韓国の俳優は？
- ・日本で人気のある韓国の俳優は？

#### 【B グループ（テーマ：ファッション）】

- ・韓国のアイメイクのトレンドは？
- ・日本のアイメイクのトレンドは？
- ・韓国で流行しているファッションアイテムは？
- ・日本で流行しているファッションアイテムは？

#### 【C グループ（テーマ：食べ物）】

- ・韓国のおかずの定番は？
- ・日本のおかずの定番は？
- ・韓国のコンビニ弁当の種類は？
- ・日本のコンビニ弁当の種類は？

#### 【D グループ（テーマ：テレビ番組）】

- ・韓国のドラマの1回の放送時間は？
- ・日本のドラマの1回の放送時間は？
- ・韓国でCMを流すタイミングは？
- ・日本でCMを流すタイミングは？

#### 【E グループ（テーマ：アルバイト）】

- ・韓国のアルバイトの時給は？
- ・日本のアルバイトの時給は？
- ・韓国の学生のアルバイト先は？
- ・日本の学生のアルバイト先は？

各グループ、上記のもの以外に数個の項目を考え、調査・意見交換を行った。同じ国でも個人により回答が異なる質問、多くの回答が必要な質問に関しては、両校で学生たちにアンケート調査を行って結果を報告しようという方法を採用したグループが多い。

#### 5.4 発表

交流によって得られた結果をPPTにまとめ、済州大は12月10日～14日、常葉大は12月3日～7日の週の授業時間内に発表を行った。発表時間は10分～15分、発表資料の作成、発表は全て日本語で行うこととした。各グループ、韓国と日本の比較を中心に、20枚～40枚程度のスライドを用意して発表を行った。発表資料は各校で別々に作成したが、同じグループでも両校で資料の提示方法、発表の内容等に違いが見られたのは興味深い<sup>8</sup>。交流による調査結果以外にも学生が自分たちで調べた資料、調査結果に対する考察やまとめを加えたグループも見受けられた。

#### 6. 結果の検証

全ての活動後に学生に対してアンケート調査を行った。稲垣（2004）に基づき、「コミュニケーション能力」「他地域・異文化理解力」「学習を追究する意欲」「協同作業する力」の4項目に関する設問を用意した<sup>9</sup>。以上全ては4件法（1. 全くあてはまらない～4. 強くあてはまる）で答える設問とし、回収後に回答の分析を行った。4件法で3と4を選んだ学生が80%以上で平均値が3.0以上であったものを「評価の高かった項目」、1と2を選んだ学生が50%以上で平均値が2.5以下であったものを「評価の低かった項目」とし、その結果を学校別に分類したものを表4と表5に示す<sup>10</sup>。なお、信頼性係数の推定値（ $\alpha$ 係数）は済州大で.95、常葉大で.90であった。

表4：学生アンケート結果のまとめ（済州大）

本交流学习での目標	評価の高かった項目 〔設問番号 <sup>11</sup> 〕平均値	評価の低かった項目 〔設問番号〕平均値
コミュニケーション能力	知らないことばや表現を辞書等で学習 〔6〕3.10 日本語での積極的な意見発信〔7〕3.03	該当項目なし
他地域・異文化理解力	該当項目なし	該当項目なし
学習を追究する意欲	該当項目なし	日本関連の情報接触の増加 〔24〕2.29,〔27〕2.00
協同作業する力	相手の意見の傾聴〔29〕3.03 作業過程の確認〔30〕3.0 グループ内のルールの順守〔32〕3.10 日程変更などの柔軟な対応〔33〕3.19 他メンバーへの相談〔34〕3.06 協働作業の達成感〔36〕3.00	該当項目なし

<sup>8</sup> 【参考資料2】に学生が作成したPPTの例を一部掲載する。

<sup>9</sup> 基本的に両校共通の設問としたが、コミュニケーション能力に関しては、済州大側は、常葉大の5項目に日本語力に関する設問を加えた。【参考資料3】に全ての設問を掲載したので参照されたい。

<sup>10</sup> 以下の結果は2クラス全体の分析結果である。

<sup>11</sup> 表中の〔設問番号〕は、【参考資料3】の設問番号と対応している。



表 5：学生アンケート結果のまとめ（常葉大）

本交流学習での目標	評価の高かった項目 〔設問番号〕平均値	評価の低かった項目 〔設問番号〕平均値
コミュニケーション能力	コミュニケーションの楽しさ（〔5〕3.13）	該当項目なし
他地域・異文化理解力	適切なテーマ設定（〔17〕3.09） 相手国や自国への理解 （〔20〕3.26,〔21〕3.09,〔22〕3.17）	該当項目なし
学習を追究する意欲	該当項目なし	韓国関連の情報接触の増加 （〔24〕2.35,〔25〕2.74,〔26〕2.26,〔27〕1.61）
協同作業する力	自分の意見の伝達（〔28〕3.13） 相手の意見の傾聴（〔29〕3.43） 協働作業の達成感（〔36〕3.26） 仲間意識の向上（〔37〕3.09） 問題点の把握 （〔38〕3.26,〔39〕3.26,〔40〕3.09）	調査の結果に対して両校の学生での考察（〔31〕2.26） グループ内のルールの順守 （〔32〕2.48）

済州大で比較的评价が高かったものは「コミュニケーション能力」「協同作業する力」である。コミュニケーション能力においては「単語や表現を覚えて使用した」「日本語を書くことに慣れた」等も 3,4 を選択した学生が 70% を超え、当初の目的であった日本語に対する慣れ、日本語力の向上はある程度達成できたといえよう。「他地域・異文化理解力」は評価が高くも低くもないが、このカテゴリーの設問 6 項目中 4 項目で「3,4 を選んだ学生が 70% 以上かつ平均値 2.8 以上」の値となったため、比較的高い評価と言ってよい。ただ、日本に留学経験、滞在経験がある学生からは、新たな発見はあまりなかったという声も聞かれた。

常葉大では「他地域・異文化理解力」「協同作業する力」が特に評価が高かった。韓国に対する理解が深まったという点では一定の効果があったといえよう。一方で「協同作業する力」に関しては評価が低い項目も見受けられた。これについては主に 2 か月間という期間の時間配分がうまくいかなかったことが原因と考えられる。

両校ともに評価が低かった項目は「学習を追究する意欲」である。テーマに関する調査という課題自体への追求心は認められたが、それが言語学習等課題の外へは広がらなかった結果となった。当初の目的の一つであった言語に対する学習意欲の向上に繋がらなかった点は今後考えるべき問題である。

## 7 反省点と今後の課題

事後アンケートでは、教員による説明、交流媒体、グループ・テーマの決定法等について感想や提案等を書くための自由解答欄も設けた。両校の複数の学生から得られた問題点を以下に示す。括弧内は、済州大・常葉大でそれぞれ回答した人数である。

- ・Yahoo! Groups の登録・使い方が難しかった（済 9・常 5）
- ・パソコンを開くのが面倒、PC 環境が悪い等で、スムーズに進まなかった（済 1・常 11）
- ・交流が授業時間外で行われたため、忘れたり連絡が取れなかったりした（済 2・常 7）

- ・テーマ決定後に開始ではなく、テーマに関しても話し合いがなかった（済大・常大）

Yahoo! Groups に関しては、半数ほどの学生が問題ないと答えた一方で、済大生からは「登録時から全てが日本語で難易度が高い」という声が目立った。常大生にも「使用経験がなく慣れるのに時間がかかった」という回答が複数見られた。代案として facebook やメールなどの回答があった。サイトの閲覧に関しては、個人用パソコンやスマートフォン所有率、普段の生活スタイルの問題とも関連し、サイトを開く頻度に大きな個人差が見られた。済大側はスマートフォン所有率が高く、授業中にスマートフォンでの閲覧時間を設けることが可能だったが、常大側はパソコンを開かないと閲覧できない学生が多く、結果として閲覧頻度が低くなるという問題があった。

担当教員の反省点としては、以下のものがある。

- ・基本的には授業外の活動であったため、学生の負担が大きかった（済大・常大）
- ・交流活動に積極的な学生とあまり参加しない学生がいた（済大・常大）
- ・掲示板への投稿は日本語力が高い学生に頼ってしまう傾向があった（済大）
- ・授業時間内にグループでの相談をする時間を取るべきだった（常大）
- ・前半は投稿数が少ないにも関わらず発表の質は高かったため、2 か月間という期間が妥当なものなのか再検討が必要（済大・常大）
- ・学生の自律性を妨げない、効果的なファシリテーションの頻度や内容の検討が必要（済大・常大）

以上の結果を踏まえ、現在は交流媒体、活動内容、活動の手順等に改良を加えて交流活動を行っている。今後は活動後のアンケート結果や掲示板への投稿内容を詳細に分析するとともに、現在行っている活動成果との比較を通し、よりよい交流活動、より効果的な交流活動の方法を考察していきたい。

## 謝辞

本研究は、JSPS 科学研究費（基盤研究（C）研究課題「交流学习不安の相違に対応したオンライン・ファシリテーションに関する実験的研究」課題番号 25350360、平成 25 年度～27 年度、吉田広毅代表）の助成を受けて実施したものであり、ここに謹んで感謝の意を添えます。

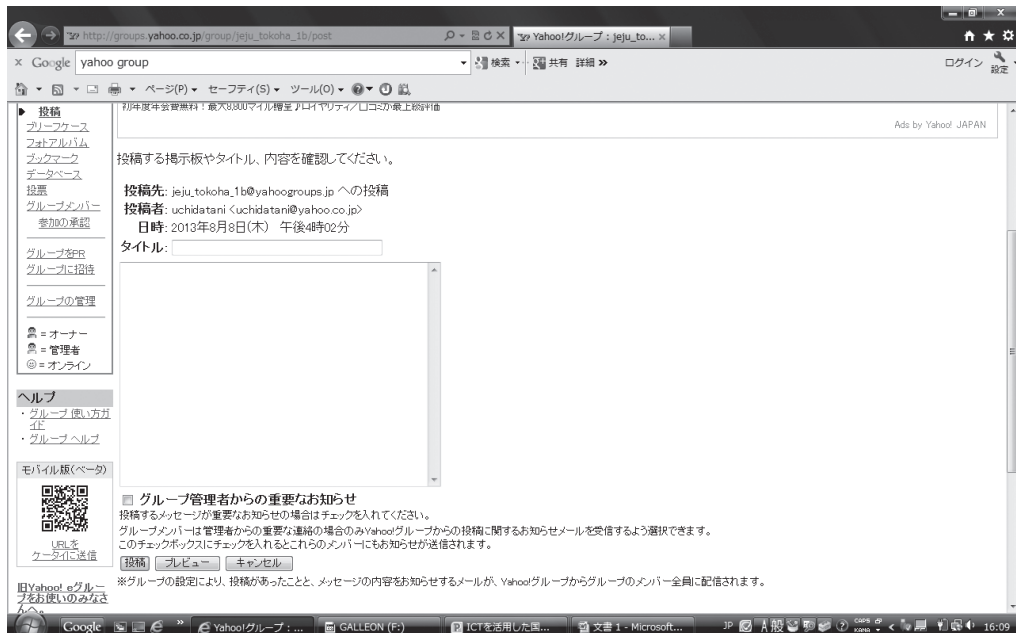


## 【参考資料1】Yahoo! Groups

以下が、実際に交流に使用した Yahoo! Groups のトップページ (B グループ) である。



投稿のタイトルがリストとして表示され、クリックすると内容を読むことができる。投稿時の画像は以下のように表示される。

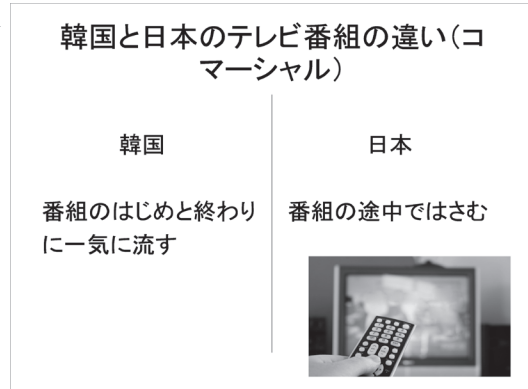


## 【参考資料 2】 学生が作成した PPT の例

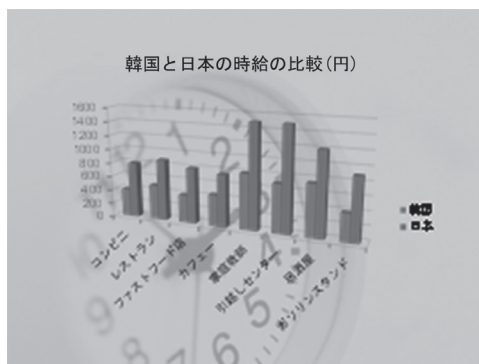
### 済州大 D グループの例



### 常葉大 D グループの例



### 済州大 E グループの例



### 常葉大 E グループの例

**時給は平均どれくらいですか？**

日本	韓国
<ul style="list-style-type: none"> <li>飲食店 750円～1000円</li> <li>コンビニ 730円～870円</li> <li>塾&amp;家庭教師 1h/1000円～1500円</li> <li>学生服屋 850円</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>飲食店 4500～5000ウォン (J:340円)</li> <li>コンビニ 3000ウォン (J:228円)</li> <li>塾&amp;家庭教師 5000ウォン (J:380円)</li> <li>服屋 4500～5000ウォン</li> </ul>

## 【参考資料 3】 学生に対する事後アンケートの項目

**コミュニケーション能力** (1～5は共通。6～16は済州大のみ)

- [1] 相手校の学生に自分自身のことを知ってもらおうとした。
- [2] 相手校の学生をより知ろうとした。
- [3] 課題を進める過程で、反対意見を恐れず、自分の意見や考えを積極的に発信できた。
- [4] 今回の活動を通して、相手校の学生とのコミュニケーションに自信が持てるようになった。
- [5] 今回の活動を通して、相手校の学生とのコミュニケーションの楽しさを感じることができた。
- [6] 交流の中で知らないことばや表現があった時に、辞書等で調べた。
- [7] 自分の考えや意見を、日本語で積極的に発信できた。
- [8] 新しい単語や表現を覚えたり、それを使ったりできた。

- [9] 同年代の日本人大学生が使う日本語表現を覚えた。
- [10] メール等で使用する日本語表現を覚えた。
- [11] 話し合いで使用する日本語表現を覚えた。
- [12] 今回の活動を通して、自分の日本語力のレベルを客観的に把握できた。
- [13] 今回の活動を通して、自分の考えを日本語で書いて伝えることに慣れた。
- [14] 今回の活動を通して、日本語を書くスピードが上がった。
- [15] 今回の活動を通して、日本語を読むスピードが上がった。
- [16] 今回の活動を通して、日本語でのプレゼンテーションに自信がついた。

**他地域・異文化理解力** （両校共通）

- [17] 相手国のことがわかるような、有意義なテーマを設定できた。
- [18] テーマに沿って、適切な調査方法で調査ができた。
- [19] 調査結果について、その背景を考察できた。
- [20] 自分の国の状況と比較して違いを明確にできた。
- [21] 相手国の状況がよく理解できた。
- [22] 自国の状況に関して、新たな発見があった。

**学習を追及する意欲** （両校共通）

- [23] 今回の活動後、日本語（韓国語）の学習時間が増えた。
- [24] 今回の活動後、日本語（韓国語）に関する放送番組やインターネットの学習サイトの利用、書籍やDVDなどの教材の購入をした（あるいは以前よりその量が増えた）
- [25] 今回の活動後、新聞やTV、インターネット等で積極的に日本（韓国）関連の情報を探すようになった。（あるいは、以前よりその機会が増えた）
- [26] 今回の活動後、日本（韓国）関連の書籍や映画などを見るようになった。（あるいは以前よりその機会が増えた）
- [27] 今回の活動後、日本（韓国）関連のイベントに参加するようになった。（あるいは以前よりその機会が増えた）

**共同作業する力** （両校共通）

- [28] 相手校の学生と話し合いの場で自分の意見を伝えようとした。
- [29] 相手校の学生の意見をしっかり聴こうとした。
- [30] 共通の課題を達成するために日程や分担について話し合い、作業過程をお互いに報告しあった。
- [31] それぞれの大学で行った調査の結果に対して両校の学生で考察を行った。
- [32] グループ内で決めたルールや約束（役割分担や提出期限など）を守った。
- [33] 他のメンバーの状況に配慮して、共通の課題を達成するよう柔軟に対応した。（例：スケジュールの変更、役割分担の変更など）
- [34] 自分の担当範囲で問題が起きた時に他のメンバーに相談した。

[35] 今回の活動を通して、協同作業の方法や問題発生時の解決法などを学ぶことができた。

[36] 今回の活動を通して、協同作業の達成感を味わうことができた。

[37] 今回の活動を通して、相手校の学生との仲間意識を持つことができた。

[38] グループ活動でうまくいった点といなかった点について考えた。

[39] グループ活動でうまくいなかった点の原因を考えた。

[40] グループ活動でうまくいなかった点の原因の改善策を考えた。